

理学部は今

題字 増田芳男理学部長

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>



平成13年11月10日 新潟大学工学部にて開催された理学部主催全学講義兼高分子学会北陸支部50周年記念講演会における白川英樹筑波大学名誉教授 演題「ノーベル化学賞を受賞して」

(写真提供 工学部化学システム工学科 青木俊樹教授)

目 次

理学部の現状……………	2	理学部学務事務電算化について……………	6
卒業生からの言葉……………	3	退官教職員の挨拶……………	
学科ニュース……………		地質科学科……………	小林 巖雄…………… 7
数 学 科……………	4	臨海実験所技官……………	岩見 喜一…………… 7
物 理 学 科……………	4	新任教職員の紹介……………	
化 学 科……………	5	自然環境科学科……………	川口正代司…………… 7
生 物 学 科……………	5	自然環境科学科……………	副島 浩一…………… 7
地 質 学 科……………	5	新潟大学全学講義……………	
自然環境科学科……………	5	「ノーベル化学賞を受賞して」……………	8
全国大学生を対象とした公開臨海実習の開催…	6	理学部ホームページについて……………	8
進路意識高揚のための支援活動……………	6	これからの行事予定……………	8
理学部校舎の大型改修工事開始される……………	6	編集後記……………	8

理学部の現状

理学部長 増田 芳男

大学改革の旋風が吹き荒れる中、新潟大学でもいろいろな改革が実施されました。ここでは、理学部の動きを中心にこの1年間を振り返ってみたいと思います。

理学部にとって特筆すべきことの一つ目は、前理学部長長谷川 彰先生が昨年12月の学長選挙で当選され、第13代目の新潟大学長になられたことです。今、国立大学は激動期を迎え、大学や学部の統合・再編や国立大学法人への移行等の難問題を抱えて大変な時期ですが、先生のご活躍をお祈りするとともに、理学部から初めて送り出した学長を理学部教職員一同が支え、力を合わせてこの難局を乗り越えたいと願っています。

二つ目は、本理学部が全国の国立大学の中から指名され、大学評価・学位授与機構が実施する分野別教育評価「理学系」を受けたことです。この評価は試行的に全国から6機関を選び実施されたものです。

理学部は、新潟大学の中で真っ先に自己評価を実施し、また、外部評価も導入する等、自己改革に努めてきました。しかし、今回の評価では、評価専門委員が本学を10月29～31日に訪れ、在学生や卒業生からの聞き取り調査を行ったり、実際の授業を視察することによって理学部の教育活動全般を評価する等の点で、いままでに経験してきた評価とは一味違ったものでした。教職員一同もこの評価から多くを学び、貴重な経験を積む機会となりました。

具体的には(1)アドミッション・ポリシー（学生受け入れ方針）、(2)教育内容面での取組、(3)教育方法及び成績評価面での取組、(4)教育の達成状況、(5)学生に対する支援、(6)教育の質の向上及び改善のためのシステムの6項目についての評価を受け、学部としての特色ある・優れた取組や改善を要する点・問題点を指摘されました。今後は、指摘された事項を教育改善に生かすべく、努力したいと考えています。

また、平成13年度から、学部で実施しているすべての授業に対して、聴講した学生による授業評価を実施することを決め、第Ⅰ及びⅡ期に実施しました。現在、結果を集計中で、この結果を日々の授業の改善に活かすシステムを整備しています。

三つ目は、理学部校舎の改修が平成13年度の第2次補正予算で認められたことがあげられます。理学部校舎は、昭和45年に建てられ、五十嵐キャンパスでは教養校舎と並ん

で最も古い建物でした。改修は3年計画で進める予定となっており、現在、改修の間の実験室や講義室の確保と、日常の教育研究への支障を最小限に食い止めるための具体策を練っているところです。

最近の改修では、校舎は新築と間違えるほどきれいに整備されるということです。この改修を契機に、学生諸君の学習・生活環境を整えるとともに、学部や全学共用のスペースを整備して、施設のフレキシブルな有効利用を図りたいと考えています。この外、大学院自然科学研究科の増築も認められました。現在建築中の大学院自然科学研究科の総合研究棟に加えて、さらに増築が認められ、関係者一同喜んでいきます。

理学部の卒業生の約50%が大学院自然科学研究科に進学しているのが現状です。大学院の建物をはじめとする施設の整備に伴い、さらに多くの学部卒業生が大学院博士前期（修士）課程や博士後期（博士）課程に進学して実力をつけ、国内はもとより国際社会を舞台に活躍してくれることを願っています。

四つ目は、平成14年12月1日から本学の教員の定員管理を一元化した体制で行うことになったことです。新潟大学は、9学部、7大学院研究科、1研究所等によって構成される総合大学です。大学全体としての総合的な機能を十分果たすために、部局間の壁を越えて全学が一体として機能できる体制を整備する必要があることから、教員の定員管理を一元化することになりました。

具体的には、全学の教員を人文社会科学系、自然科学系、医歯学系の三つの学系からなる教育研究院に所属させ、そこから教員がそれぞれの学部、大学院等の教育研究に出向するシステムです。これは、18歳人口の減少、行財政改革による人員削減等のスリム化が避けられない状況で、教育研究の機能を維持、強化するために採られた措置です。このシステムでは、全教員の協力によって広範な教育研究分野を有機的に連携して、学生に魅力あるカリキュラムを提供することを目指しています。

理学部は、工学部や農学部及び大学院自然科学研究科と協力して自然科学系の教員組織と望ましい運営方法及び具体的な教育内容等について検討を進めているところです。

後援会の皆様には私達のこのような取組にご理解をいただき、一層のご支援をお願いする次第です。

卒業生からの言葉

■卒業にあたって

吉田 美里（数学科）



友達と共に過ごした徹夜の勉強会。紅一点だったソフトボール大会。那須ハイランドパークへの卒業旅行。あれもこれも楽しい事だらけでした。この楽しい時間がもっと続けばいいけれど、卒業しなければいけません。

人生には時として^{めいてい}酩酊が必要ですよ。忘れてしまいたい、

あのこと、このこと。そう言えば、ああ、あのことだって…。「楽しかった」は吹き渡ってくる一陣の涼風…。卒業式を一生に一度の晴れ着で着飾る自分を他人様の様に思える早過ぎた四年間でした。

私はこの春、教職に就きます。人に何かを教えるという立場は少しやっぱり優越的になってしまうから『気をつけま〜す。』

生きていく上で重要なのは無駄話しではないでしょうか。一人ぼっちの漂流はいくら空が青くたって淋し過ぎはしませんか？ 果てし無く爽やかな人達に会ってみませんか。つまり、数学科の全員に。

■卒業にあたって 竹内 純一（物理学科）

大学に入学して、そして卒業。4年間ほんとうにあっという間でした。振り返ってみると、何物にも束縛されない、無責任でままな時間を過ごせました。学校にも行かず、目が醒めてから、何をしようかを考え、自分のやりたいようにやってきました。

やっていないことを後悔するより、いろんなことをたくさんやった方がいい。周りの人がどう思うか、そんなことはどうでもいいからと思いながら日々を過ごしました。そうしたら、単位が足りず卒業ができなくなりそうになり、他の人が卒論を頑張っている時に、私は単位をとるために頑張っていました。大学では高校と違って授業や進路のことを自分で選択できます。言い換えると自分で選ばなければなりません。そこには必ず責任というものが伴います。怠けたり楽をすることは簡単にできますが、後々の負担となって自分に返ってきます。つまり、自分の行動に責任をもちなさいということです。（その責任だって放棄することができませんけど…。）

こういうことは、まだ幼い時からさんざん親や先生にいわれてきたと思います。二十歳を過ぎたいい大人がこんなことも解からずに今まで生きてきたなんて笑っちゃいま

す。しかし、私は誰よりも大学生生活を充実させていたと思います。

最後に4年間の大学生活を活かし社会人として頑張っていきたいです。

■卒業にあたって 佐藤 武（化学科）

新潟大学に入学してから早四年、卒業の時期になりました。入学当初はどんな生活が待っているのかと不安、希望の両方を持っていましたが、今思えばそんな不安は必要なかったと感じています。部活にサークル、飲み会や友達との遊び、それにバイトや勉強など、いろいろ活動することが多く、大学生でなければ到底できないような充実した四年間を過ごしてきたと思います。また新潟に来て、湿気まみれの猛暑や雷の鳴りやまない猛吹雪の中、空調設備のない部屋での試験勉強も経験しました。しかしそれも、徹夜で友達と遊んだことなどと共にいい思い出となっています。四年生となり研究室に入ってから、ゼミの準備に追われたり、徹夜で実験したりと大変でしたが、とてもやりがいのある毎日だったと思います。大学生活では様々な経験をしましたが、これら思い出の中に残っている教訓や忍耐、時には発散などが、これから始まる新たな生活にきっと役立つことでしょう。私は大学院に進み、さらなる学力や探求心の向上に努めますが、社会人になる方々もこの四年間にあった、それぞれの貴重な体験を胸にこれからもがんばってほしいと思います。

■卒業にあたって 狩野 和海（生物学科）

早いもので、大学に入学してから四年が経つ。この四年間を振り返ってみると、様々なことが思い出される。入学当時は高校時代と違って、自由になる時間があるにも多いことに戸惑っていた。しかし、今では、その余りある時間は自分を見つめるために必要な時間だったのではないかと考えている。さらに、大学では自分とは考え方の異なった人たちと話したり行動したりする機会が増え、自分や物事を客観的な目で見ることができるようになってきた。こういったことが自分を精神的に成長させてくれたと思う。

また、この四年間で、勉強など様々なことに対する態度や考え方も少しづつ変わってきた。特に勉強に関しては自ら欲して行うものであることを痛感した。大学という、勉強を行う上で恵まれている環境にいても、自分が動かなければ何も得られないのだ。勉強に限らず、自分で考え、行動し、その行動に責任を持つことを学んだ。その他、この四年間で学んだことは数え切れないくらいたくさんある。卒業を目の前にした今、大学で私に学ぶチャンスを与えてくれた人たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。

■卒業にあたって 木津 幸子（地質科学科）

理学部地質科学科に入学して4年間、本当にあっという間でした。それというのも、ほとんど休む暇なく忙しい日々を送ってきたからだと思います。新潟大学の地質科学科の特徴は、野外で実際に地層を観察しながら学ぶというところ。1年生から日曜日にも関わらず巡検に行き、2年生では調査やレポートに追われて秋休みも冬休みも休めず、3年生になると夏休みも奪われるというハードスケジュール。もちろん4年生では卒業論文で一年中てんでこ舞いました。

そんな忙しい生活でも、学科の二十数人の仲間たちがいたからこそ楽しく過ごせたと思います。3年生の大巡検を始めとする宿泊しての巡検や、進級論文の調査のために数人のグループで行った共同生活など、一緒に過ごす時間が長いからこそ仲間たちの色々な面が見えて、お互いを知ることができ協力できたと思います。また、同じ道を歩んできた先輩たちもレポートの提出や進級論文、卒業論文の発表など、その大変さがわかるからこそ私たちに多くのアドバイスを下さいました。

たくさんの人たちに支えられて過ごした4年間。大変なこともあったけれど、素敵な思い出を作れて本当に良かったです。

■卒業にあたって 丸山 真也（自然環境科学科）

入学して1、2年は自分の中で抱く自然環境科学とこの学科の体制とのギャップになやまされました。が、先生方や友人とのさまざまな対話を通してこの卒業を迎える年になりようやく自然環境科学科というもの少しみえてきた感じがします。自然環境科学科は立ち上がってからわずか8年しかたっていない若い学科です。その中にさまざまな問題を抱えていますが、そのような問題をうやむやにせず学生との対話をもってよりよい方向を探ろうとしているこの姿勢こそ自然環境科学科にしかない特徴であると感じました。自分にとっては講義や実験で得た知識や技術より、そのような友人や先生方とのコミュニケーションでえたものが最高の収穫です。ここで得た楽しいこと、辛いことすべてが今この日を迎えている自分を成していると感じます。この4年間は本当に内容の濃い充実したものであったといえます。一生のうちのわずか四年という時間でしかないけれど、ここですごした時間は自分の人生の宝となることでしょう。

学科ニュース

□数学科

近年、高校生の数学離れが話題になる中で、数学科は大きな転換期を迎えています。それは、平成14年4月から実施される情報教員免許に向けてのカリキュラム改訂です。この教員免許は、数学教員免許と理科教員免許に加えて、新たに承認されたものであり、数学科は、先の数学に関する基礎学力向上とともに真剣に取り組んできました。

例えば、今回新たに導入された「基礎ゼミ」は、新1年生から新3年生対象にして開講されたゼミ形式の科目であり、数学の面白さを感じてもらうだけでなく、数学特有の論理展開をしっかりと身につけてもらうことを目的としています。それと同時に、多様化する情報化社会からの要請に対応できる能力を持つ学生を要請すべく、「計算機概論」、「計算機実習」、「情報社会」など情報関係の科目が、本年度から新たに開講されます。

数学科教員一同は、この大きなカリキュラム改訂が、これから社会に巣立っていく数学科学生にとって、更なる飛躍の原動力となることを期待しています。

□物理学科

大学評価・学位授与機構の大学評価の実施に伴い、「物理学科としての特色ある研究・教育と将来構想」について考えさせられた年度でもありました。特に、「学生に何を求め、何を伝えるか」を再確認することは非常に重要であると考えます。これらを踏まえ、来年度の新入学生から必修科目と演習に重点をおいた新カリキュラムへの移行を開始致します。

長谷川彰教授が理学部を離れられ、2月1日より学長に就任されました。大学の独立行政法人化も見込まれる大変な時期に先生のリーダーシップが十分に発揮されますよう物理学科としても協力して参りたいと思います。また加賀、東のお二人の先生が停年で退職されました。

本学科の教員が中心となり「コンピュータで作る21世紀の新材料」と題したシンポジウムを、日本物理学会新潟支部主催で11月17日新潟市で開催致しました。家富、小林先生の講演に高校生16名を含む40名あまりの参加があり好評のうちに終了致しました。教員が高校へ出向き最先端の物理をわかりやすく説明する「出張講義」や受験生確保のための高校訪問を引き続き実施する予定です。

西門近くで行なわれている、大学院の総合研究棟新館の一期工事が終了し、二期工事も8月末には完工の予定です。3月当初から物性理論・実験の研究室が移転し、9月には原子核実験研究室が新しい建物に移転します。来年度から

は3年計画で理学部校舎の大改修が始まる予定です。3年後には、教育・研究環境が一新されるものと期待しています。

□化学科

平成11年度から開始した、化学の基礎から高度に専門的な科目まで段階・系統的に指導する新カリキュラムの1期生が3年次を終えました。またこの3年生のうち8名は、インターンシップ実習を本年度受講しました。インターンシップとは、単なるアルバイトとは異なり、自身の専門に関連した職業への就業体験を通じて職業意識の育成を図るものです。化学科の学生がお世話になった実習受け入れ先の内訳は、新潟市衛生試験所(6名：写真はその様子)、新潟県保健環境科学研究所(1名)、福井県工業技術センター(1名)でした。受け入れ先の評価も受講生の感想も良好で、初年度としてまずは順調な滑り出しでした。今後は公的機関のみならず一般の化学系企業にも受け入れ先を拡充すること、また実習期間の長期化などを課題として、関係機関のご協力を仰ぎながら内容をより充実させたいと考えています。



□生物学科

平成13年度入試から導入され、生物学科では2年目となった推薦入試には、3名の募集人員に対し、昨年度と同じ17名の志願者があり、11月24日(土)、25日(日)に行われた試験を志願者全員が受験し、5名が合格しました。

12月14日(金)午後には、理学部合同講義室において、生物学科2年生以上を主な対象とした生物学科就職セミナーが開かれました。講師と演題はそれぞれ、(財)新潟県衛生研究所先端技術センター(岩室村) 鶴原喬氏「環境科学とバイオテクノロジーの一翼を担う～先端技術センターの業務について」、金印わさび(株)(名古屋市) 鶴飼優慈氏「今、学生に求められるものとは～商品開発の現場から」、カネコ種苗(株)(前橋市) 西本淳氏「農業におけるたねやの役割」で、生物学科で学んだ内容が活かせる業種にはどのようなものがあるのか、採用担当者あるいは生物学科出身者としての就職活動に対するアドバイスなど、学科教員にはできない有益なお話があり、出席した学生にとっては大いに役立つものだったと思います。セミナー開催に援助いただいた理学部後援会の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。

□地質科学科

新入生を迎えるために今、現1年生(新2年生)たちが大奮闘中です。地質科学科では毎年、春の地学ハイキングを一般市民を交えて行いますが、案内の軸は新2年生です。県下の幾つかの候補地を下見し、1ルートを決定。さらにそのルートに通いつつ勉強し、地質の案内が出来るだけの力を身に付けていきます。その過程では上級生や大学院生、時には教員も協力します。こうして、新入生や一般市民およそ100名以上が参加する春の地学ハイキングを迎えます。

新3年生は、大巡検と呼ばれる1週間に及ぶ地質見学旅行を3月末～4月初めに行います。今年は中国・四国地方横断の予定で、西南日本の帯状地質区分とそれぞれの地質帯について、事前学習会を行いながら猛勉強中です。

新4年生は卒業論文のテーマを決め、これから調査に入る地域や岩石についての資料を収集、勉強中です。期待と少しの不安を胸に新しい課題に挑もうとしています。

春はそれぞれの学生にとって新しい年度を迎え、「今年は…」と胸に期す時期です。教員は昨今の大学改革の嵐の中、様々な会議に振り回されつつ、これまでの年度を振り返り、新年度について思案中です。新年度がそれぞれにとって進む道を探る年でありたいと思います。

□自然環境科学科

12月に川口正代司助教授と副島浩一助教授の2名が赴任されました。また、来る4月には、山平寿智助教授が加わる予定であり、フルメンバーで充実した教育体制が整います。客員教授としてエチオピアから、ルルセゲド・アヤレウさんも来られており、英語のセミナーなども行われ、国際性も増しています。2月には、教育の向上を目的とした学生と教員の対話集会を催し、お互いの意見の交流を図りました。また、各教員がオフィスアワーを設け、授業に対する学生の疑問に答え、理解を深めるように助言を与えています。

昨年4月から1年間をかけて取り組んできた4年生の課題研究成果が、この2月に口頭およびポスターという形で発表されました。学科の特色である物理・化学・生物・地学の4分野からの興味深い研究成果について、学生と教員の間で二日間討論しました。今年度からは、コンピューター画像をそのままカラープロジェクターで出力できるようになり、カラフルで手の込んだオリジナリティの高い図を用いたわかりやすい発表が多く行われ、自然環境科学科らしい新潟県の特徴を活かした研究も数多くありました。

平成14年度新潟大学公開講座が、6月から自然環境科学科を中心として催されます。テーマは「水と環境」です。

全国大学生を対象とした公開臨海実習の開催

臨海実験所では去る8月20日から25日の間、全国の大学・学部生を対象とした公開臨海実習を例年通り開催しました。北は北海道大学から南は琉球大学まで、全国各地の様々な大学から総勢22名の受講者が得られました。今回は、学外協力教官として日本医科大学のIshwar S. Parhar先生をお招きし、英語による比較内分泌学の講義などを行っていただきました。この公開臨海実習は、国立大学臨海臨湖実験所長会議の主催によるもので、全国の各国立大学附属の臨海・臨湖実験所および関連するセンターで毎年開催されています。単位互換制度により他大学の実習でも単位を得ることができます。興味ある方は、是非ご参加下さい。各実習内容など詳しくはホームページ (<http://www.kurcis.kobe-u.ac.jp/station/>) をご覧下さい。



進路意識高揚のための支援活動

理学部学生の進路意識高揚の目的で昨年度と同様に主として3年生を対象にいくつかの就職説明会（1回目平成13年6月19日、2回目同10月26日）及び進学説明会（平成13年11月7日）を実施致しました。就職説明会においては、リクルート社の青田氏を招いて1回目は「インターネットを用いた就職活動」、2回目は「就職活動におけるインターネット」という題目で講演をしていただきました。1回目は約50人、2回目は約100人の学生が参加しておりました。また、進学説明会では大学院自然科学研究科の田村教授と田中教授に講演をしていただきました。進学説明会には約80人の学生が参加しておりました。これらの企画は今後とも、何等かの形で継続してゆきたいと思っております。

今年度も、「企業の採用状況調査と企業開拓」を目的として、平成13年12月25日～27日の3日間、関川・周藤の2人で8つの企業「住友製薬（株）・東京コンピュータサービス（株）・伊藤忠石油開発（株）・（株）エーザイ・中外テクノス（株）・旭テクノグラス（株）・三井金属鉱業（株）・（株）アロカ」を訪問し、過去の採用実績や求める人物像等について伺ってまいりました。どの企業においても、「コミュニケーション能力を備えた何事にも前向きな人」が求める共通の人物像であったように思います。

（新潟大学就職相談員 関川浩永）
（理学部就職委員長 周藤賢治）

理学部校舎の大型改修工事開始される

理学部校舎の大半は昭和45年に建築された建物で、方々の壁には亀裂がはしり、崩れ落ちそうな箇所も見受けられます。また、理学部、大学院自然科学研究科の改組により、理学部校舎で研究する大学院生、教員が大幅に増え、多くの学生、大学院生、教職員が古くて狭い校舎の中で勉強し、研究を行わなければならない状況が続いてきました。

平成13年度の補正予算で理学部校舎の改修工事が認められ、今年の夏からA棟の工事が開始されます。これまで非常に窮屈であった控え室・休憩室を拡げて、ゆとりのある学生生活をおくることができるよう計画しています。学生図書室、自習室、就職資料室の新設や情報端末室の拡充・機能の向上を図り授業以外にも自由に解放して、予習・復習あるいは情報収集に利用できるようにします。

大学院自然科学研究科の建物も急ピッチで建築されており、教養校舎、理学部校舎の改修と合わせて教養教育から大学院までの教育・研究施設が整備されます。これらの施設を活用して、皆さんが気持ちよく勉強し、さらに、最先端の研究に取り組んでくれることを期待しています。

（建物委員会委員長 檀上篤徳）

理学部学務事務電算化について

平成14年度より学務事務（聴講登録、成績登録等）が電算化され、Internetを通して各種情報の入出力が可能になります。大学におけるIT革命です。これにより学生は大学のコンピュータ端末から聴講届票を提出したり、休講通知を携帯電話から見るようになるのです。

さて、このIT革命が大学教育にもたらすものは何でしょうか？確かに学生、教官、事務官の今までの学務事務に関する手間は多に省けるでしょう。しかし学生が教官の顔を見ることができ、講義の雰囲気も感ずることもなく、聴講票を提出するようになっては、それで本当の教育ができるのかとも思うのです。

大学での講義というのはテキストの内容や試験の成績がすべてではありません。教官と学生間のコミュニケーションにより、先達のPhilosophyを学生に伝えることも大学教育の重要な役割であると考えています。

ITはコミュニケーションのひとつの選択肢であり、使い方によっては非常に便利なものです。しかしITを使うことが目的となったり、そのために本来あるべきコミュニケーションがおろそかになるようでは、本末転倒といわざるを得ません。大学におけるIT革命はそのようなことのないようにと切に希望します。

（学務事務電算化WG委員長 白井聡）

退官教職員の挨拶



越佐の野山を歩いて

地質科学科 小林 巖雄

昭和43年、理学部地質鉱物学科に勤め、33年間になります。教室では、学生の皆さんと、新潟の野山に出かける機会が多く、四季の移り変わりを花で知り肌で感じ、山の幸を口にしながら歩きました。

集団疎開から焼け野原の東京に戻り、数十年で家並みが復活し、都会で成長した私にとっては、新潟の地は自然で溢れていました。赴任時、清水トンネルを抜けたとたんに真っ白な雪でおおわれた山に出会いました。

雪解けの山に春がこぶしの花とともにやってきます。明るいブナ林も束の間、短い蒸し暑い夏を過ぎると、秋の平野は黄色一色に変わります。そして、冷たいみぞれがいつの間にか雪になり、はや1年が過ぎたなとだれでも思うのでは。

四季の変化に富む越佐で過ごせたのは、かけがえのないものとなりつつあります。4年間、9年間と、新潟での生活を自分で豊かにしてほしいと思います。若い人と、越佐の大地から多くのことを学ぶ日々でした。奥深い自然を先生として、ぶつかっていく若者に期待しています。



退官に寄せて

臨海実験所技官 岩見 喜一

理学部附属佐渡臨海実験所に採集人として採用されて以来、はや44年の歳月が過ぎましたが、3月末日をもって職場を去ることになりました。この間、無事に勤め終えることが出来たのも、諸先生方をはじめ職場の皆様方のご援助のおかげです。有難うございました。

採集人として過ぎし日々を思い返しますと、佐渡島の陸上や海、河川に棲息している動物は、種を問わず採集して諸先生方の研究に供与してきました。そのおかげで、幾人もの高名な先生方にお会いすることができ、御研究の協力に対する感謝のお言葉をいただいたのは良き思い出です。しかし、以前は実験所周辺で普通にみられた動物も、環境の変化によるためか、まれにしか採れなくなったものが年々増えているのを感じています。

末筆ながら、理学部の益々の発展と皆様方の御健康を心よりお祈り申し上げます。

平成13年3月で退官される物理学科加賀浩之先生は病氣御静養中ということで、また東正彬先生は御多忙ということで退官に向けての原稿を辞退されました。長い間理学部への教育研究に関する御貢献に心から感謝申し上げます。

新任教職員の紹介



川口正代司（自然環境科学科）

研究か音楽かとずっとゆれていた。そんな僕を研究の方に強く引き寄せたのは、今からちょうど50年前に数学者の Alan Turing が提唱した反応拡散波理論である。彼は生物学者ではないが、その理論は生物の発生や分化の背後にある力学を見事に言い当てている可能性がある。Turing 理論を知って以来、生物の見方が変わった。このシンプルで美しい理論を実証するサイエンスを展開したいと思った。一方、世界的な食料・医療問題、あるいは地球規模での環境問題に対してなんとかできないかという気持ちも、研究を捨て切れない理由である。僕はミヤコグサというマメ科の草本を扱って根粒形成の研究をしているが、このミヤコグサを含むマメの仲間は非常に種が多く、またグイズを筆頭に有用資源が多い。そこで近年ゲノム解析通じて、「共生」のみならず「多様性」「有用性」の解明に役立てようという総合的な研究に発展している。ただの雑草。しかしワクチンをつくるミヤコグサが医療の届かない地域に生えていたら、とも思うのである。



副島 浩一（自然環境科学科）

昨年の12月16日付けで理学部自然環境科学科の所属になりました副島（そえじま）と申します。それ以前は本学大学院自然科学研究科の所属でした…と書くと、博士課程を修了したての若い新任教官かと思われるかもしれません。残念ながら？ 学位を取ってそろそろ10年経ちます。専門は原子分子物理学です。最近はおっぱら軌道放射光を使って、原子の光電離過程や分子の光解離過程の実験を高エネ研でおこなっています。また、新潟大では檀上先生と協力して、多価イオンによる分子のクーロン爆発に関する実験や環境関連分子の電子分光の実験をおこなってきました。これまでは完全につくばでの実験に重心がありました。心の広い檀上先生のおかげで高エネ研の放射光施設で、その職員と間違われるほど思う存分実験をさせていただきました。これからは環境科学を意識して、少しずつ新潟大での実験に重心を移していきたいと思っています。個性的な他分野の先生が大勢おられる環境科学科では、広範な知識が得られると期待しています。

新潟大学全学講義 「ノーベル化学賞を受賞して」

平成13年度の全学講義は、理学部が当番部局となって、2000年度のノーベル化学賞受賞者である白川英樹先生を講師にお招きし、平成13年11月10日に実施されました。当日は、本学学生や教職員に中学生、高校生及び市民の方々を加えて約550名が白川先生の講義を拝聴しました。

先生はノーベル賞の受賞についてたんと述べられた後、ご自身の体験を通して「私達が実験をする場合、予想される結果ばかりに注目しがちですが、予想されなかった結果も観察して記録する習慣を身につけることが大切です。予想されなかったところに新しい発明や発見が潜んでいるものです。」と述べられました。さらに「創造性とはなんだろうか、そして創造性を育むためにはどうすべきか。創造性とは固定観念にとらわれずに自由な発想ができることであり、創造性を育むには何事にも率直な疑問を抱き、その疑問を解き明かすように努力することが大切であり、小・中学校でもっと創造性を育てる教育に力を注ぐ必要があると思います。」と締めくくられたことが印象的でした。

(理学部長 増田芳男)



理学部ホームページについて

平成13年度4月に立ち上げた理学部ホームページ（以下HPと省略致します）も、今年でちょうど1年を迎えようとしており、現在改良を加えて更に良いものにするべく委員一丸となって頑張っています。学生生活、教官の横顔など種々の情報が掲載されています。ウェブサイトは、

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp/>

です。ぜひ一度御覧になってください。

この仕事は、計算機の知識をかなり必要とします。例えば、入試関係の情報も掲載されているため、該当個所の更新作業を業者に依頼することができず、HP委員自らが行う必要があります。また、当HPへの不正アクセス防止のため、ログと呼ばれる通信記録を常に確認しておく必要もあります。また、同窓会と後援会関係のページや高校生のページなど、新しいページが追加される際には、該当ページは学内からの閲覧のみを可能にしておいて、テスト走行させるなどが必要です。このような作業を行っている中で、情報を取り扱うことの大切さを勉強致しました。

最後に、本HPの作製及び運営に関して、理学部後援会より御援助頂いておりますことに、本HP委員会を代表して、深い感謝の念を申し述べさせていただきます。

(HP委員会委員長 明石重男)



これからの行事予定(平成14年度前半)

4月5日(金)	入学式
4月8日(月) 9日(火)	ガイダンス
4月10日(水)	授業開始
5月下旬から6月初旬	黎明祭
7月上旬	第3年次編入学試験
8月上旬	理学部説明会
8月11日(日)	夏季休業
から9月30日(月)	秋季卒業式

編集後記

大学改革という時代からの要請の中で、教育と研究以外の仕事が増大したと感じるのは、私だけではないでしょう。大学院生と討論して新しい研究の方針を見出す感激、一人静かに専門書を開く喜びが少なくなっていく中で、特に同世代の教官が研究に打ち込んでいる姿、学会出席のため旅立つ姿を見て焦燥感を覚えたこの1年でした。でもこのことは同時に、私より目上の先生方が私よりもっと忙しく用事をこなしておられる姿を拝見させていただくことにもなりました。「教育研究させてもらえる環境」は、今までの先輩諸先生方の御尽力により作られていたことを知りました。「研究をする」のではなく「研究をさせてもらえる」ことがどれほど有難いことかを知りました。

理学部の教官は皆、少しでも教育研究環境を良くしようとする真面目な先生の集団です。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。(重)

広報委員：明石(数学)、川崎(物理学)、岡村(化学)、岩崎(生物学)、志村(地質科学)、石田(自然環境科学)